

## 楊介『存真環中図』の成立と変遷について

三鬼 丈知

大谷大学

北宋の医家楊介の著『存真環中図』は、解剖に基づく臟腑図・経絡図を収載し、これより後の医書に多大な影響を与えた重要な著作である。これより先に描かれた『欧希範五藏図』、及び崇寧年間に泗州で行われた刑屍解剖と「古書」とに拠って、その図は描かれたという。ただ、この書そのものは、明代には失われたと見られる。しかし『存真環中図』が成立してから、様々な医書がこれに依拠して臟腑図・経脈図を描き、またその図に付された解説を引用したため、『存真環中図』が、おおよそどのような書であったかを推定することはできる。

『存真環中図』の著者、楊介、字は吉老については、泗州の名医としてよく知られていたらしい。例えば、『医籍考』が引く、南宋王明清『揮塵余話』卷三の「楊介吉老者、泗州人、以医術聞四方」という記述など、名医であることが記され、張杲の『医説』には、徽宗を治療したという話も掲載されている。楊介の生卒年は明らかではないが、徽宗の政和三年（一一一三年）に『存真環中図』が成立したとされるので、少なくともこの年までは健在だったであろう。また、北宋の文学者、賀铸（一〇五二—一一二五）に、「游盱眙南山示楊介。楊善方藥，著書甚多。癸酉十一月，與之同游賦」と題する賦があり、楊介との交遊について記されている。賀铸の生卒年から推して、この癸酉は元祐八年（一〇九三年）のことと判断できる。仮に楊介が賀铸と同年代だと想定すると、六十歳前後で『存真環中図』を著し、賀铸とともに盱眙南山に遊んだ四十歳の頃にはすでに多数の著書があったということになる。

楊介の著書について、『存真環中図』の他には、『宋史』芸文志に『四時傷寒総病論』、『世善堂書目』に『傷寒論脈訣』などの著書があったことが著録されている。しかしこれらの書は残念ながら『存真環中図』も含めて、全て佚書となっている。それでは、『存真環中図』は、いつごろまで世に伝わっていたのであろうか。渡邊幸三は、明の葉盛の『菴竹堂書目』、明末の毛辰の『汲古閣毛氏藏書目』等に著録されていることから、「明末のころには伝存していたことは明らかである」と述べている。ところが、汲古閣の書目には『存真環中図』を見出すことができない。また、『菴竹堂書目』は文淵閣書目の内容が紛れ込んでおり、どこまでが元来の著録か判断が難しい。因みに、『文淵閣書目』には、「存真図 一部、1冊、缺」として、『存真図』は既に失われたものとして記録されている。書目の上では、趙希弁『郡齋讀書志』後志（一二四九）、及びそれにもとづいた馬端臨の『文献通考』経籍考（一三一七）の著録から、元の初期までは存在していたと考えられる。書目以外では邱濬（一四二一—一四九五）の『重編瓊臺藁』卷九に収められた、「明堂経絡前図序」に、「或者貽予以鎮江府所刻明堂銅人図面背凡二幅。……（中略）……乃就本図詳加考訂，復以存真図附繫於内，命工重繪而刻之」という記載があり、『存真図』を用いて臟腑の図を補訂したことが記されている。また、李濂（一四八八—一五六六）による『雲嶠翁伝』には、方伎の書を多数所蔵していたという雲嶠翁について述べ、彼が『内外二景図補』を著したときに参考にした書物を挙げているが、『華佗内照図』など、『存真環中図』を襲った書名は複数見られるものの、逆に『存真環中図』自体には触れられない。このことから、『存真環中図』は明代まで伝存してはいたが、嘉靖年間（一五二二—一五六六）には、既に稀覯の書となっていたものと推察される。

『存真環中図』の図と図説は、『頓医抄』、『万安方』や『華佗内照図』に保存されている。また、幻雲『史記』注や、王好古『広為大法』、などにも図や図説が残されている。これらを比較・検討することで、『存真環中図』の本来の姿に迫る。